様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７２０２６０

研究課題名（和文）共生社会の構築に資する持続可能性教育としての日本語教師養成プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a JSL Teacher Training Program Based upon Education for Sustainability

研究代表者
鈴木　寿子（SUZUKI, Toshiko）

早稲田大学・付置研究所・准教授

研究者番号：００５９８０７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,100,000円、（間接経費）　630,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は「持続可能性教育としての日本語教師養成プログラム」を作成することである。大学院志望者のための日本語教育学講座、大学学部生のリベラルアーツ科目、日本語教師の自主研修等のフィールドにおいて同プログラムをデザインしたのち実施し、プログラム中の対話の展開や終了後の受講生の認識を質的に分析することにより、内容やデザインの確定及びプログラムの意義を検討した。その結果、受講生は①事前課題、②議論、③ふり返りの3つのステップで学習を進展させつつ、グローバル化社会の在り様を自己を起点として学ぶことがわかった。本プログラムは、日本語教師養成のみならず、隣接分野での応用が可能であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to develop a training program for people who teach Japanese as a Second Language(JSL) based upon the education for sustainability. The developed program focuses on these following fields: people who preparing for a graduate school, a class in liberal arts department, and a training course for already active JSL teachers. The process of discussion and the reflection of the participants in all these fields were analyzed in qualitative studies. The results show that the participants' method of study comprised of 3 stages; preparation, discussion, and reflection. In this way, the participants learned not only about today's globalized society but were focused to think about their own role as individuals in such a society. Based on this result, this kind of program may also be applied to related area of study as well as a JSL teacher training program.

研究分野：日本語教育

科研費の分科・細目：教師教育

キーワード：日本語教育　教師教育　協働　言語生態学　同行者としての教師　内省　対話　成人学習

１．研究開始当初の背景

グローバル化社会の進展による人・モノの移動の激化に加え、少子高齢化をにらんだ外国人労働力への期待を背景に、日本国内の日本語学習者の増加が進んでいる。日本語教師は学習者が日本社会の構成員として生活できるよう、学習者の多様な状況に共感的理解をもち、共生社会を推進することが期待される。ところが、日本語教師の半数は無給のボランティアであり、継続的研修を受けにくい状況におかれている。今後は、雇用・勤務形態や現職教師・新任教師の別を問わずに実施可能な日本語教師の力量形成に資するプログラムが必要になってくる。

２．研究の目的

本研究の目的は、多様な学習者に対応し、学習者と共に学び力量形成を図る日本語教師養成プログラム、「持続可能性教育としての日本語教師養成プログラム」（以下、プログラム）を開発することである。持続可能性日本語教育とは、グローバル化の変動の下で生きる人々が、どのような環境の下でどのように生活を組み立てているか（特にライフコースに関わる選択をどのように行っているか）を知ることを通して、次の三つのことを達成することを目指す日本語教育である。

① 自分の生活が、世界のコト、モノ、人のつながりと、どのように関わっているか、どのようにつながっているかを、自分を起点（出発点）として理解する。

② そのようなつながりの中に編み込まれている自分は、どのように生きたらよいか、例えばライフコースに関わる選択をどのように行えばよいか、その際、他の人とのつながりを自分はどのように持ちたいか、考える。

③ 以上をもとにして、自分とは何か、について考え、自分なりの持続可能な生き方を追求していく。

本研究では、3 年間の計画で、教材・シラバス案作成→実践→分析のプロセスを踏み、持続可能性日本語教育に基づいた教師養成プログラムを完成させる。プログラム策定の過程において複数の実践を試行し、プログラム参加者の実践中の協働の様相・実践後のふり返り記録を分析する。この実践研究の分析の結果をプログラムに反映させることで、プログラム学習内容の拡充・精緻化を図る。また、本プログラムの実践によって獲得できる能力とはどのようなものかを明らかにする。

加えて、本プログラムの応用可能性を高めるため、上述の実践研究と並行し、留学生の意識調査を行うこととした。さらに、プログラムの内容の精緻化及び充実化を図るため、既存の日本語教育プログラム分析を並行して行った。

３．研究の方法

本研究は（1）プログラム実践・分析、（2）意識調査、（3）既存プログラム分析の 3 部からなる。

（1）　プログラム実践・分析

日本語教師養成を幅広い観点からとらえるため、以下の 4 つの立場における教育プログラムの策定を試みることにした。まずは（a）日本語教師志望者、（b）現役の日本語教師　である。この 2 つは従来から日本語教師養成講座やあるいは現職日本語教師のブラッシュアップ講座などで対象者となっていた。これに加え、日本語教師になるという潜在的なニーズを持つ対象者として、（c）日本人学部生、（d）留学生　を加えの 4 つの立場をプログラム受講者として設定した。（a）～（d）はそれぞれ日本語教育学専攻の大学院の講座、現職日本語教師の長期研修、日本人向け学部生リベラルアーツ科目、留学生向け日本語科目、の４つのフィールドで行った。

＜プログラム実践の概要＞

	時期	実施者	参加者	学習内容やﾃｰﾏ
(a)大学院の日本語教育学講座	2011 年 4 月～2011 年 7 月	運営ﾒﾝﾊﾞｰ 5 名	研究生他 10 名	日本語教育、自己、世界、研究
(b)現職教師の長期研修	2011 年 7 月～2013 年 11 月	教員 3 名（自主研修）		ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ化社会、日本語教師の生き方、雇用、
(c)学部生のﾘﾍﾞﾗﾙｱｰﾂ科目	2012 年 4 月～2012 年 7 月	教員 12 名	学部生 23 名	ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ化社会、雇用、食糧
(d)留学生の日本語科目	2011 年 5 月～2011 年 8 月	教員 1 名	留学生 5 名	原発事故、幸福観、水、食料、雇用、貧困、結婚

上記の各フィールドにおいて、①シラバス作成、②実践、③分析を行った。具体的には、①シラバス作成では、新聞や関連書籍の記事などの検討から持続可能性日本語教育の教材を作成し、持続可能性日本語教育の実践的体系のシラバス案を作り、実施した。②実践では、特に異文化間学習の分野で用いられている、対話的問題提起学習やロールレタリングなどの手法を用いて、協働で行うクラス授業の効果的な方法を探った。③分析では、言語生態学や成人学習論の観点を用いて質的に分析した。

（2）　意識調査

将来の（特に海外における）日本語教育を担う専門人材の視点をプログラム策定に生かすため、日本の大学院に留学し、日本語教育学を学ぶ留学生に対する意識調査を行った。日本語教師となる人材は女性が多いことから、女性の大学院留学生を調査対象とした。

＜意識調査の概要＞

	調査時期	対象者	方法
意識調査	2011 年 6 月～8 月	大学院留学生 5 名	ｲﾝﾀﾋﾞｭｰ

（3）　既存プログラム分析

既存の日本語教育プログラム分析としては、お茶の水女子大学で 2000 年から実施されてきた共生日本語教育実習を選び、分析対象とした。この教育実習は、日本人住民と外国人住民の共生という先進的なテーマを主

題に据えており、持続可能な生き方を追求するための日本語教育を掲げる本プログラムと共通する理念を持っていることから、調査対象として選定した。

＜既存プログラム分析の概要＞

	調査対象	方法
既存ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ分析	お茶の水女子大学 共生日本語教育実習 (2000～2011 年報告書)	教案部分を 概念化して分類

４．研究成果

(1)　プログラム実践・分析

(a) 大学院の日本語教育学講座

プログラム実施者の学びの観点から分析した。運営メンバー5 名によるプログラム実施中及び実施後の内省を検討した結果、①能動的自己認識、②自分仕立てのパースペクティブの表明が共通して現れた。実践後、各自が今後の行動基準を言語化したところ、運営メンバーは自己を起点とした“同行者としての教師”のあり方や、人間としての生き方（人間活動）と教師職（教師活動）の一体化を模索し、つながりを重視して自己の課題の克服を試みる意志を形成していた。この背景には、日本語教育を学んできた自己を能動的に受け止め、世界の事象と自己の立場を結びつけたことと、多様性ある参加者と対話できたことが理由として考えられた。プログラムの受け手（参加者）のみならず、実施者側にも学びの意義のあるプログラムの可能性が示唆された（雑誌論文⑥に詳述）。

(b) 現職日本語教師の長期研修

プログラム実施者がすなわち参加者となる、自律型研修における本プログラムの運用可能性を検討した実践である。本研究は、現職日本語教師の持続可能な生き方を考える自主的で自律的な教師研修のデザインを模索することを目的として行った。具体的には言語生態学を理論的背景として「対話的問題提起学習」と「ロールレタリング」という実践を、かつて同じ大学院で学び、現在は異なる職場で働く 3 名の日本語教師間で試みた。活動を行った結果、3 名の間で言語を活性化した内省および対話が実現し、社会の現状に対する理解、自己理解、他者との相互理解を深めることができた。「対話的問題提起学習」と「ロールレタリング」を組み合わせた本実践は、持続可能な生き方を考えるための教師研修の在り方の具体例を示したと考察した（雑誌論文②に詳述）。

(c) 日本人向け学部生リベラルアーツ科目

教員がティームティーチングで行う実践である。Web 教材や掲示板を利用し、教員と学生の意見交換を活発に行う、授業内対話と授業後対話を活性化させた本実践の概要は、報告書『グローバル化社会を生きるための力を育成する授業―持続可能性日本語教育に基づいた授業デザインと成果―』にまとめた（http://sustainability.nomaki.jp/ から全文取得可能）。

参加者である学生の認識の変容は、1）社会に対する既有の知識と授業で得た知識をすり合わせながら自身の意思を確かめる段階、2）知識を構築・統合し，現実を変えたいという意志を持ち始める段階、3）自己・他者・世界（モノ・コト）とのつながりや因果関係を見出し、グローバル化にどう立ち向かうかの意志を結実させる段階の 3 つの段階に分けられた。学部生に対するリベラルアーツ科目において、グローバル化社会の実像を理解し、そこでの生き方に対する意思の形成ができることを示した（学会発表⑥に詳述）。

また、参加者である学生と、実施者側である教員間のやりとりがどうであったのかを調査するため、Web 掲示板に投稿された学生のコメントと教員のフィードバックを分析したところ、教員のフィードバックには、学生の捉え返しを受け止め、それをもとに教員自身も自己と社会とのつながりを捉え返し、それを以って学生に応答するという特徴が認められた。学生と教師が相互に支え合いながらグローバル社会に対する認識を深めていっていることがわかった（学会発表①に詳述）。

(d) 留学生向け日本語科目

日本で留学生として日本語を学ぶ学生に対する日本語授業として持続可能性日本語教育を展開した。参加者である 5 名の学生は、プログラムの実施を経て、世界はどうなっているか（世界認識）、そのような世界の中でどのように生きていくか（行動基準）、そこで人とどのような関係を作っていくか（人間関係）、私とは何か（アイデンティティ）の総体である生態学的リテラシーを拡充させていることがわかった。本実践をもって、持続可能性日本語教育に基づいたプログラムにおける「第一言語を活用する」、「事前課題を与える」、「協働で授業を進める」、「授業内では読み・聞き・話し・書く活動を組み込みつつ、全ての活動の中で、考えるという機能を発動させる」という螺旋的に継続する活動形式が確定できた（雑誌論文⑦に詳述）。

(2)　意識調査

未来の日本語教育を担う高度人材である女性の大学院留学生たちが、葛藤の中で、自らの留学をいつ、どのように終結させるかを自問して内面の様子を明らかにした意識調査である。具体的には、留学生たちが保持する母国での価値観と、留学生活の中で新しく身に着けた日本における価値観が相反するため、留学を続ける上でその葛藤の中に置かれやすいことが明らかになった。特に、結婚、出産といったライフイベントにまつわる選択が葛藤を生じさせる傾向が見て取れた。今後、留学生を対象としてプログラムを行う場合、プログラム参加者の現在の状況に対する

支援にとどまらず、将来の展望を把握し、そのサポートを行う必要があることが示唆された（雑誌論文①に詳述）。

（3） 既存プログラム分析

共生日本語教育実習における活動の内容を分析したところ、実習の前期である 2000 年～2006 年と後期である 2008～2011 年度で活動テーマは大きく異なっていた。前期においては、特に日本語を母語とする人をターゲットとした反省的・啓蒙的アプローチで実習が行われていた。他方、後期の実習においては、グローバル化社会に生きる人々の協働的・対話的アプローチへと変化していた。協働的・対話的アプローチは、グローバル化社会を生きる個と個が、そこで深刻な問題となりつつある雇用、食、消費生活、エネルギーについて共に考え、各自を起点として知識が拡大・深化することで、人々の間に知識が創造されるという信念に基づくものである。

後期実習において協働的・対話的アプローチが実現していた背景には、実習生が参加者に対して、《問題提起者》および《同行者》としてのポジショニングで振る舞い、参加者をグローバル化する社会における《労働者》《消費者》とみなした上で、実習生と共に活動を作る者として位置付けていたことが理由として挙げられた（雑誌論文④及び⑤に詳述）。

上述の結果から、「持続可能性教育としての日本語教師養成プログラム」は、現役日本語教師や日本語教師志望者、大学生や留学生からなるプログラム参加者に、持続可能な生き方を追求する契機を与え得る教育実践であることが示された。また、実施対象や内容他の点で柔軟性の高いプログラムであり、日本語教師養成の目的以外においても活用できる応用性の高さが認められた。日本語教師養成という目的にとどまらず、広く現代に生きる地球市民としての知や態度の形成に役立てられ得ると考える。

今後、同様のプログラムを実施するときのために、本研究で明らかになったプログラムの骨子を下に示す。なおこの骨子は本研究を実施した 3 年間の結果に基づくものであり、今後も研究の積み重ねによって更新されるべきものと位置付けたい。

＜プログラムの骨子＞

実施対象（参加者）	・大学生 ・大学院生 ・留学生 ・日本語教師
学習内容	雇用や食糧等､ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ化社会にまつわる諸問題
ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ実施期間	半期～数年
実施形態	・大学等教育機関での通常授業として ・Web と対面授業を活用したｵﾝﾗｲﾝ講座として ・自主研修として
実施規模	数名～数十名
活動形態	・個人活動（主に読む・書くを中心とした事前課題） ・ｸﾞﾙｰﾌﾟ活動（主に話す・聴くを中心とした協働活動） ・全体活動（個人やｸﾞﾙｰﾌﾟから出た意見を共有し、次なる課題・論点の提示） 上記の活動を混合した螺旋的な展開
活動の例	・対話的問題提起学習 ・ﾛｰﾙﾚﾀﾘﾝｸﾞ ・ふり返り ・自己を起点とした世界認識の作図課題 ・登場人物の視点を重んじた読解教材や視聴教材
実施者の役割	同行者、問題提起者
意義	自己を起点とした生態学的ﾘﾃﾗｼｰ（世界認識、行動基準、人間関係、ｱｲﾃﾞﾝﾃｨﾃｨ）の構築
ｱﾌﾟﾛｰﾁ	協働的・対話的ｱﾌﾟﾛｰﾁ

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　７件）

①鈴木 寿子、女性の大学院留学生はどのように日本留学を開始、継続、 終結するのか、高等教育と学生支援:お茶の水女子大学教育機構紀要、査読有、第４巻、2014、pp. 8-19、http://hdl.handle.net/10083/55009

②唐澤 麻里、小浦方 理恵、鈴木 寿子、持続可能な生き方を考えるための日本語教師研修の提案―対話的問題提起学習とロールレタリングの協働実践、言語文化と日本語教育、査読有、第 46 号、2013、pp. 31-38

③鈴木 寿子、留学の開始と終了を後押しするものは何か―大学院女子留学生へのインタビュー調査からの一考察、定住外国人のアイデンティティに関する調査報告（神田外語大学研究助成パイロット研究「地域外国人の人材育成としての日本語教師養成講座～シラバス開発の試み」研究成果報告書）、査読無、2013、pp. 7-18

④トンプソン（平野）美恵子、鈴木 寿子、共生日本語教育実習における対話の縦断的分析―共生を目指すアプローチの変遷、人間文化創成科学論叢、査読有、Vol.15、2013、pp.349-357、http://hdl.handle.net/10083/52867

⑤鈴木 寿子、トンプソン（平野）美恵子、「共生日本語教育実習」における共生を目指した対話活動のデザイン分析―ポジショニング理論による検討、異文化コミュニケーション研

究、第25号、査読有、2013、pp. 1-16 、http://id.nii.ac.jp/1092/00000776/
⑥鈴木 寿子、トンプソン（平野） 美恵子、房 賢嬉、張 瑜珊、劉 娜、言語生態学に基づく日本語教師養成プログラムの構築とその可能性—運営メンバーによる内省の分析から、言語文化と日本語教育、査読有、第 43 号、2012、pp. 11－20、http://hdl.handle.net/10083/54407
⑦鈴木 寿子、留学生教育としての持続可能性日本語教育の活動展開—国内の大学における実践例、査読有、第2巻、高等教育と学生支援:お茶の水女子大学教育機構紀要、2012、pp. 1-13、http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/51763/1/02_1-13.pdf

〔学会発表〕（計　１３件）
①三輪 充子・佐藤 真紀・鈴木 寿子・トンプソン 美恵子・野々口 ちとせ・半原芳子・房賢嬉・岡崎眸、グローバル化社会を生きる力を育てるリベラルアーツ科目の試み—学生のふり返りに対する教師のフィードバックに着目して、第 20 回大学教育研究フォーラム、2014年3月18日、京都大学（京都）
②鈴木 寿子、日本語教師養成を前提としない日本語教育学科目で何が学べるか、2013年度日本語教育学会研究集会 第 10 回 関西地区、2014年3月8日、園田学園女子大学（兵庫）
③鈴木 寿子、小浦方 理恵、唐澤 麻里、日本語教師間の対話的問題提起学習はどう展開するか—成人学習としての日本語教師研修、第 46 回お茶の水女子大学日本言語文化学研究会、2013年6月29日、お茶の水女子大学（東京）
④鈴木 寿子、小浦方 理恵、唐澤 麻里、自律的教師研修としての対話的問題提起学習の実践—日本語教師の持続可能な生き方を考えるために、2012年度日本語教育学会研究集会 第10回 関西地区、2013年3月2日、甲南女子大学（兵庫）
⑤鈴木 寿子、小浦方 理恵、唐澤 麻里、日本語教師の持続可能な生き方を考えるための取り組み—対話的問題提起学習とロールレタリングの協働実践から、第 45 回お茶の水女子大学日本言語文化学研究会、2012 年 12 月8日、お茶の水女子大学（東京）
⑥トンプソン（平野）美恵子、鈴木 寿子、小田 珠生、佐藤 真紀、張 瑜珊、房 賢嬉、半原 芳子、三輪 充子、岡崎 眸、グローバル化社会をいかに生きるかを考えることばの教室の試み—受講生による認識に着目して、2012 年度日本語教育学会秋季大会、2012 年 10月14日、北海学園大学（北海道）
⑦鈴木 寿子・トンプソン（平野）美恵子、外国人と日本人の対話をどのように深めるか—共生日本語教育実習における「問い」の変化から、2012 年度日本語教育学会研究集会 第7回　関西地区、2012年9月1日、日本学生支援機構大阪日本語教育センター（大阪）
⑧鈴木 寿子、日本留学中の女子大学院生の語り—留学生活の意味づけに着目して、2012年日本語教育国際研究大会、2012 年 8 月 18 日、名古屋大学（愛知）
⑨崔 鉉弼・ロマン・パシュカ、鈴木 寿子、舘岡 洋子、日本語教師の成長を支えるものは何か、2012 年日本語教育国際研究大会、2012年8月19日、名古屋大学（愛知）
⑩トンプソン（平野）美恵子・鈴木 寿子、共生日本語教育実習における対話の変遷—シラバスの縦断的分析から、第 44 回お茶の水女子大学日本言語文化学研究会、2012年7月7日、お茶の水女子大学（東京）
⑪鈴木 寿子、持続可能性教育としての日本語教育を通じた世界認識の協働的構築—EPAと自己の関連を考える活動から、第3回協働実践研究会、2012年2月4日、東京海洋大学（東京）
⑬鈴木 寿子、共生日本語教育実習生は教室と社会の関係をどのように見出しているか—内省レポートに現れた視座から、2011年世界日本語教育研究大会、2011年8月21日、天津外国語大学（中国・天津）

〔図書〕（計　１件）
鈴木 寿子、早稲田大学出版部、共生社会の構築を支える日本語教師養成の実践研究、2013年、237頁

〔その他〕
鈴木 寿子・トンプソン 美恵子・三輪 充子（共編）グローバル化社会を生きるための力を育成する授業—持続可能性日本語教育に基づいた授業デザインと成果、人間生態学としての言語生態学研究会（発行）、314頁
http://sustainability.nomaki.jp/

６．研究組織
（1）研究代表者
鈴木　寿子（SUZUKI, Toshiko）
早稲田大学・日本語教育研究センター・准教授（任期付）
研究者番号：００５９８０７１